

第2分科会

大学からアーカイヴズを考える — 京都大学大学文書館の活動から —

西山 伸 (京都大学大学文書館)

報告者は、かつて2002年度全史料協研修会(2002年10月16日、於富山市)において「大学アーカイヴズ」の意義と今後の課題」と題して、報告を行ったことがある。その折には、報告者の勤務する京都大学大学文書館(以下、当館)の設置の経緯およびその概要、そして報告者の考える大学アーカイヴズの役割等について取り上げた。その後4年が経過して、当館も閲覧業務をはじめとした様々な具体的な活動を開始し、また国立大学を中心に大学アーカイヴズを取り巻く状況にも変化が見られるようになってきた。そこで、本報告は、最近の状況も踏まえて改めて大学アーカイヴズの立場からアーカイヴズに求められるもの、課題等について考えることを目的とした。

1 大学アーカイヴズの状況

— 国立大学を中心に —

(1) 沿革史編纂後の資料保存・利用

1980年代後半頃から、いくつかの国立大学で大学史資料の整理・保存・調査研究等を目的とする組織が作られ始めた。東北大学記念資料室(1963年設置)は例外的に早い時期に設置されているが、東京大学史料室(1987年設置)、九州大学大学史料室(1992年設置)、名古屋大学史料室(1996年設置)などがそれにあたる。これらは大まかに言えば、いずれも大規模な大学沿革史の編纂終了後の資料保存や利用を念頭に設置された組織である。本報告では詳細に

立ち入る余裕はないが、こういった動きの背景には大学沿革史編纂が、多くの一次資料に基づいたアカデミックな事業になりつつあったことが挙げられるであろう。

(2) 情報公開法施行以後

上記のような状況は、2001年4月の「行政機関の保有する情報の公開に関する法律」(情報公開法)の施行以後、若干の変化をきたすようになる。京都大学大学文書館(2000年設置)、広島大学文書館(2004年設置)、名古屋大学大学文書資料室(2004年改組)、九州大学大学文書館(2005年改組)、北海道大学大学文書館(2005年設置)、大阪大学文書館設置準備室(2006年設置)などがここ数年で次々と活動を開始した。これらの組織は、例えば北海道大学大学文書館の目的として「本学の保存期間が満了した法人文書及び本学の歴史に係る各種資料の収集、整理、保存、調査研究等を行い、閲覧、公開等の利用に供すること」(北海道大学大学文書館規程第2条)と謳っているように、従来の史(資)料室の機能である自らの大学の歴史に関する資料を扱うことに加えて、非現用になった法人文書(2004年4月の国立大学法人化以後は、それまでの「行政文書」が「法人文書」と称されるようになった)の収集・整理・保存・調査研究等が重要な役割とされるようになったのである。周知のように情報公開法では、国の行政機関に対して現用文書の厳密な管理と公開が求められたのだが、現用文書だけでな

く、非現用になった文書の「受け皿」としての組織の必要性がいくつかの国立大学で認識されるようになり、それが最近の動きにつながっていった（なお、本報告では議論を単純化するため国立大学のアーカイヴズを主な対象としたが、私立大学も含めた日本の大学アーカイヴズ全体の最近の状況については、全国大学史資料協議会編『日本の大学アーカイヴズ』京都大学学術出版会、2005年、を参照されたい）。

2 京都大学大学文書館の現在

(1)設置の経緯

当館設置の経緯は、次の二点に集約できる。第一は前述の情報公開法施行であり、同法に対応する学内のワーキンググループにおいて非現用行政文書管理の必要性が議論され、「公文書館」設置が求められていた。第二は『京都大学百年史』（2001年編纂終了）編纂の際に収集された多くの資料の保存・利用が求められていたことである。これらの動きを受けて、2000年11月に当館は設置された。折から京都大学では創立百周年記念事業の一環として、シンボリック建物である時計台の改装が進んでおり、2003年12月に、当館製作の常設展「京都大学の歴史」が改装なった時計台記念館の1階にオープンし、2004年4月からは同じく時計台記念館に閲覧室が設置され、資料の公開が行われることになった。

(2)業務

①資料収集・整理・公開等

当館の業務の中心は言うまでもなく資料収集・整理・公開等に関するものである。その資料のさらに中心をなすのは京都大学の非現用法人文書になる。京大は、学部10、大学院17、研究所13、教育研究施設等20によって構成される総合大学であり、学生数22,452人、常勤教職員5,190人を数える。したがって、管理している現用文書の冊数も多く、本報告時にファイル管理簿に登録されていた簿冊数

は108,629点となる。そのうち毎年非現用となった文書が原則としてすべて各事務から当館に移管され、その大部分が当館の書庫に運ばれてくる。例えば2005年度に当館書庫に運ばれてきた文書は7,984冊であったが、ここ数年その数は漸増の傾向にある。運ばれてきた文書を配架・照合して確定した目録を作成し、個人情報を確認の上公開するのが当館業務の根本的な流れになる。また、書庫の収容能力の関係もあり、2004年度からは非現用法人文書の評価・選別作業も開始した。まだ試行錯誤の段階にあるのが率直なところだが、毎年評価対象のうちの30%前後の文書を廃棄している。

こういった非現用法人文書以外にも、京大や他大学等で作られた刊行物や図書、さらに卒業生や元教職員から寄贈・寄託を受けた個人資料についても、収集・整理・公開等の業務を行っている。特に個人資料は学問史・技術史等に関係するものなど、法人文書だけでは分からない大学の歴史を示す場合が多い。現在のところ、当館では非現用法人文書を約50,000点、図書・刊行物約12,000点、個人資料約60,000点を所蔵している。

②調査研究

資料に関係する調査研究も業務として挙げられ、その成果は毎年発行している研究紀要に反映させている。調査研究の内容としては、大きくアーカイヴズ論と京大を中心とした高等教育史の二つに分けることができ、現在前者では現在資料の評価・選別についての研究会を継続的に開催しており、後者では2004・2005年度の2年をかけて京大における「学徒出陣」について数値データと聞き取り記録をまとめて報告書を作成した。

③展示

当館では、展示も重要な業務になっている。前述のように時計台記念館の1階に歴史展示室が設けられ、常設展「京都大学の歴史」と企画展を開催している。企画展は、

京大の歴史の中で特定のテーマを設定して当館主催で行うものを年2回程度開催しているほか、学内の部局や研究室等に貸し出して行われる場合もある。時計台記念館全体の利用が活発ということもあり、展示には年間4万人近い入場者がある。

④教育

学生に対する教育面では、当館が所蔵している資料を使いながら京都大学の歴史の講義を行っている。この、学生に対する自らの大学史の講義（「自校史教育」と呼ばれる場合もある）は、近年少なくなない大学で実施されるようになってきている。概して受講生の評判はよいようだが、徒に愛校心をかき立てたり、単なる大学の宣伝に終わらぬよう、努めていく必要があろう。なお、当館では、学生だけでなく新採用職員に対しても年2回京大の歴史についての講義を行っている。

⑤広報活動等

その他、京都大学の歴史に関する様々な問い合わせに答えたり、受験生向けのオープンキャンパス、同窓生のホームカミングデー、湯川秀樹・朝永振一郎生誕百周年記念事業といった大学の行事に参加したり、京大が交流協定を結んでいる海外の大学の学生に京大の歴史を講義したりといった業務も少なくない。ここ1、2年特に、こういった種類の大学全体の広報活動に当館が関わっていく度合いが増えつつある。法人化に象徴的に見られるような、近年の「大学改革」の動きの中で、国立大学も広報活動の重要性を認識し、それぞれの大学の「個性化」を図ろうとしている状況が、当館の活動にも反映していることは間違いないだろう。

3 組織におけるアーカイヴズ

このように、昨今当館の業務は多様化している。しかし、当館が最も根幹に置いている

業務は、繰り返しになるが非現用法人文書に関するそれである。非現用法人文書は、組織の成り立ちから現在に至るあゆみを最も系統的、包括的に示す資料である。特に京大の場合は、幸い移転や大きな災害、戦災等に見舞われなかったことが他大学と比べた法人文書の「良好な」残存をもたらした側面は否定できない。しかし、いずれにしろこういった法人文書は、対外的には、自らの存在理由を説明するものであり、また広く情報の公開に貢献するものであり、一大学史を超えた歴史研究の基本的資料としても価値のあるものと言える。また対内的には、蓄積された業務の証拠であり、これらを一括管理することは様々な意思決定の上でも、日常業務の上でも事務の効率化をもたらすものと言えよう。さらに、非現用とはいえ全学の文書を一覧できる立場から現用文書の管理についても効果的な提言をすることも期待できよう。このように考えれば、非現用法人文書を扱うアーカイヴズは、組織にとって不可欠な機関と言えるのであって、敢えて図書館や博物館との差異を挙げなくても十分であるように考えられる。

むしろ、今当館が直面している問題は、現在の大学が置かれている状況も手伝って、業務が拡散傾向にあることと言えよう。むしろ、誤解を恐れずに言えばアーカイヴズは親組織あつてのものであるから、親組織の方向性とは無縁に独自の原則を貫くことは非現実的である。しかし、限られた人員（専任教員3、非常勤職員6）のなかで、「やらなければいけないこと」「できること」「できないこと」を分別していくことが今後の当館の大きな課題となるであろう。